



火傷あととオイル染みと——Working Holidays in Tours

メルセデスの新型Cクラスを、他のジャーナリストとともにドイツでテストしたあと、僕はひとり別れてパリに向かった。パリの宿はいつも、ヴィラ・ボルト・マイヨーという、小さいが快適なホテルである。ここはペリフェリーク

の出入り口に近くて便利なのだ。食堂の壁にT57ブガッティ・アトランティックをテーマにしたアールデコ調の絵が掛かっているので不思議に思い、初めて泊まったとき尋ねたら、ここ

の主人はブガティストなのであった。
急いで顔を洗うのもそこそこに、迎えに来た
ジャン-ポール・キャロンと晩飯に出る。そこは
ビヤンクール河岸にあるQuai Ouestという新し
い大きなレストランで、いまパリで話題の店だ。
日本ならさしつめベイエリアや横浜などにある

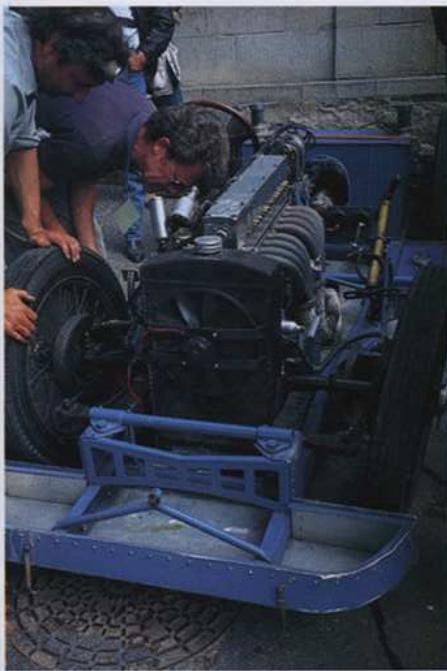


ボブ・サザランドのレプリカ・ブガッティに乗ったあと、「こんな嬉しい車には乗ったことがないぞ」

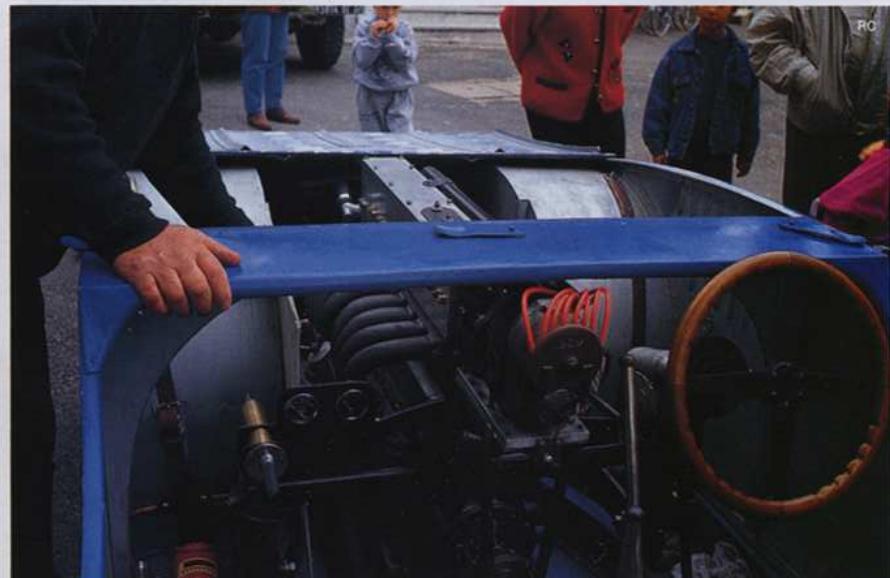


90度コーナーにて。ミュールーズ博物館のブガッティに迫るヴォワゼン。空力に対する対照的なアプローチ。

トゥール GP1923 / 1993
のプラクティス・スタート。ヴォワザンの隣りは地元メーカーのローラン・ピラン、2台のブガッティ“タンク”も見える。



パドックでボディを外して応急修理するサザランドのブガッティ。横内バネを規制するリーディングアーム取り付け部が壊れた。



ブガッティ“タンク”にはエンジンとコクピット間の隔壁がない。その騒音と熱の凄まじき！

ような、生の演奏を聞かせる気軽な店だが、パリでは珍しいとみて、俳優や歌手などセレブリティがよく来るという。ほぼ

満員のテーブルを搔き分けて行くと、ヤアと立ち上ったのは、あのレトロモビルの主催者、マルク・ニコロジと奥さんのイザベルだった。聞けば彼はブガッティでタルガ・フローリオに出場してから、そのままスイス国境に近いディヴォースでまた別のレースに出て、帰ってきたばかりという。いつもながら彼らはタフだ。ドイツで数日間を過ごしたあとだけに、食事もワインも美味しく、おおいに話が弾んで楽しい一夜だった。

今度のフランス行きは、パリから西南へ250kmほどのトゥールで、1923年に開かれたACFグランプリの70周年記念イベントを取材するためである。1923年GPは、ブガッティT32“タンク”，ヴォワザン“ラボラトワール”など、前衛的な空力ボディのレーシングカーがデビューしたことで知られる。翌日の昼ごろ、ブショーから

借りた106XTでブローニュの森に近い約束の場所に行くと、路傍でニコロジが、例のソニア・デロネイ・カラーに塗り分けたT35の前輪を外して、しきりに何か直している。ブレーキが、レースで酷使して甘くなつたので、カムに鉄片を挟んで調整しているのだった。やがてマルクの同僚フランソワ(T37)、クロード(T35)、それにいつも赤いT35Bに乗っているブルーが、今回は1926年シナール・ワルケル“タンク”を300TEで牽引してやって来た。以上がぼくのよく識っているフランスのブガッティ・ギャングたちで、いつでもどこでもGPブガッティをカッ飛ばしてゆく、痛快な連中である。間もなくDBや、フランスでは珍しい英國のレイルトン・エイトなども加わった。そしていつものように、トゥールまでどのルートを通るべきや、どこで美味しいものを喰うべきやについて、

カンカンガクガク口角泡を飛ばして議論始めた。こうなるとお手上げで、すぐに小1時間くらいは経ってしまう。

パリを出て30分くらいで昼飯を喰う。フランスといっしょに旅行する最大の楽しみは、美味しいものをリーズナブルに提供する店をよく知っていることだ。今回もそのとおりだった。2時間近く飲んだり喰ったりしたあとでは、GPブガッティのペースはいっそう速くなり、たちまちオートルートの彼方に消えた。こちらは地理不案内だから、トレーラーを牽くブルーのメルセデスに、フラットアウトで追従して、2時間後、無事にトゥールに着いた。

主催者が取っておいてくれた郊外のホテルにチェックインしたら、バーで手を振る一団がいる。アメリカからやってきたボブ・サザランドたちである。ボブもまた傑作な人で、いろいろ素晴らしい車を持っており、ミッレミリアやラグナセカの常連である。昨年日本で行なわれたラ・フェスタ・ミレ・ミリアにも、1930年マセラーティ3LGPで参加していた。いつも荒唐無稽なプロジェクトと取り組んでおり、CG7月号でテストした、マツダREを積んだマクストンというスポーツカーも彼の発案である。今回は、10年くらい前にスクランチから製作した1923年ブガッティT32“タンク”レプリカを、わざわざアメリカから持て来た。

そこへ小柄ながらがっしりした体躯のフランス人が現われて、「フィリップ・モークです」と手を差し延べた。彼は立志伝中の人物だ。まだ42歳のモークは、ほとんど無一文からスタートして、いまでは自ら興したフランス

随一のハイテク・カーボンファイバー・メーカーの社長である。76年～85年ルノーF1のボディは、すべてモーク社の製品だという。いまでは軍需品からエルメスのトランクまで、モーク社はあらゆる分野に材料を供給している。彼が古い車の虜になったきっかけは、三菱に依頼されて、同社が1936年に製作した全輪駆動PX33の複製を新素材で作ったことだという。そして、たまたま読んだガブリエル・ヴォワザンの伝記に感銘し、1923年のGPカー“ラボラトワール”的レプリカ製作を決意したという。

その夜はモーク夫妻主催のヴォワザン・パーティで、CGフランス通信員グリフォージソン、ミュールーズ博物館のガルニエ副館長、ミュゼー・アンリ・マラトルの館長さんなど、多くの知人に再会した。長い、長い食事が終わると午前1時、外へ出ると、草原にはヴォワザ